Chapter 17 : **法廷のカオス――正義のハンマー**

場所：ポケトピア最高裁判所

法廷は満員だった。

被告席に立っていたのは、悪名高き二匹のポケモン――

・「利用規約違反者」と書かれた赤いリコリステープでぐるぐる巻きにされたゲンガー

・訴訟の匂いを嗅ぎつけたかのようにふわふわ浮かぶダークライ

そして裁判長席にそびえるのは、鉄のごとき正義の体現者――  
判事ハンマーを300ポンドも軽々と振り下ろす、あの鋼鉄の審判者、判事キョジオーン！

**冒頭陳述：**

スーツ姿でビシッと決めたルカリオがネクタイを整えた。

「判事殿、被告はガチャ依存を利用し、心理的ダメージを与え、さらにはポケモン一匹を誘拐しました。ついでに性格も最低です」

サーナイトが続けた。「あとゲンガーのガチャ率、曇りの日の色違いより低いです」

ティンカトンが目を細める。「ふーん…」

ゲンガーに向き直る。「有罪を認めるか？」

ゲンガーは爆笑した。「有罪？　このシステムは俺が作ったんだぜ！　資本主義のヒーロー様だ！」

ボンッ。

ゲンガー、床にめり込む。歯がカジノのチップみたいにカチカチ鳴った。

**次は…ダークライの番。**

マッシブーンが二本の腕でダークライを前に突き出し、残りの二本で書類を整理していた。

「こいつ、アーチェリー大会の最中にジュナイパーを昏睡状態にしようとしたんです。スポーツマンシップの“ス”の字もない」

ティンカトンが目を細めた。「最後に何か言いたいことは？」

ダークライは不敵に笑いながら、足元に七つの影のポータルを開いた。  
陪審席、傍聴席、売店、天井、果ては裁判所猫の寝床まで。

「おっと～？」と軽いノリでにやり。「うっかり出ちゃったねぇ～」

だが、問題がひとつ。

一つのポータルに長く留まれないのが、彼の宿命。

バキッ  
ズドン  
ゴンッ  
ボンッ  
ドカーン  
グシャァ

ティンカトン、ハンマーでもぐら叩き。  
連打速度は明らかにバグってた。

**法廷、大喝采。**

マッシブーンは、ぬいぐるみのようにぐったりした二匹を片手ずつで持ち上げた。

ルカリオは満足げにうなずき、  
サーナイトは判事と一緒にセルフィーを撮っていた。

**判決：**

・ゲンガー：マギャップ保育園で1000時間の社会奉仕。インターネット使用禁止。  
・ダークライ：夢の中で税金の話だけを聞かされるセラピーに200年間参加。  
・判事ティンカトン：自分にクッキーを贈呈。満足。

**廊下にて：**

エーフィがブラッキーとブースターを誇らしげに抱きしめる。

ニンフィアは黙々と書類整理中。

アブソルは自販機を警戒しながら見つめていた。  
「次、俺がガチャられる気がする…」

そしてヤミラミはというと――  
モップバケツに向かってこっそりとささやいた：

「次のイタズラ…伝説になるぜ……！」